

科目区分： 専門教育科目 音楽教育  
授業科目名： 器楽アンサンブル（１）～（８）  
対象年次： １～４

## 「器楽アンサンブル」に関する授業評価

音楽教育講座：市川 克明

### 1. 授業の目的と到達目標

演奏する喜びを通じ、自らが器楽アンサンブル（吹奏楽）全体の一部として、「他と合わせる」、いわゆる「アンサンブル」を体験する。さらに体験することにより、管打楽器奏者にとり個人での演奏だけでは味わえない、「音楽演奏の専門家」としての心構え、役割を理解し、かつ合奏の指導法を実体験することにより、今後の学習、指導活動、あるいは組織マネジメントの理解に生かし、「学校教員候補」としての資質を高める。

### 2. 授業の概要について

本授業は、教育学部芸術文化過程・学校教育教員養成課程で音楽を中心に、教育学部の他学科専修、および大学オーケストラ、吹奏楽での経験者、60名余りの学生による合奏授業を主体としている。なお、指導・指揮は担当者が行っている。

前期（器楽アンサンブル（１）、（３）、（５）、（７））は主として吹奏楽演奏における基礎的練習法、音合わせの方法、楽器の演奏法を学ぶ。とりわけ、初心者に関しては経験者学生による指導、大学院生のボランティアによる指導を取り入れ効果的な練習方法を取り入れた。また、例年夏に行われる全日本吹奏楽コンクールの課題曲３曲（４曲中）を取り上げ、練習を重ね、経験者学生が出身校などで指導できるようなアドバイスを含め重点的に練習を行った。課題曲以外にも、学生アンケートで要望の多かった楽曲を取り上げ、前期授業

の最終回で授業内小演奏会（音楽教室内の教員、受講者以外の音楽教室の学生対象）を行った。

後期授業（器楽アンサンブル（２）、（４）、（６）、（８））では例年１２月に開催される教育学部で音楽を専門とする学生による「楽友会コンサート」に向け練習を重ねた。特に、今回は同学部芸術文化過程のピアノ専攻学生を独奏者とするピアノ協奏曲を演奏した。９月に学内でオーディションを行い６名の参加者から２名を選抜（通常は１名であるが、より多くの学生に独奏者を体験させるため）し、演奏会当日途中で交代させ２名を独奏者として演奏、そのオーケストラ部分を吹奏楽で担当した。独奏者学生はもとより、器楽アンサンブル受講者にとっても、これまで体験したことのない協奏曲というジャンルに関し、大変有意義な体験をさせることができた。

また、この演奏会后１月から２月は４名から１２名の小編成による合奏アンサンブルを取り上げ、１０のグループに分け練習させ、指導した。基本的に学生主体で練習を行わせ、最後の授業で授業内発表を行った。この中では、珍しい編成のピアノを含んだ木管５重奏（フルート・オーボエ・クラリネット・ホルン・ファゴット）を行い、担当者自ら（ホルン担当）学生と練習を行った。全授業終了後の教育学部音楽専修学生による楽友会主催の学内演奏会でもその練習成果を披露した。

### 3. 授業外学習の促進について

授業の性格上、基本的に授業外学習（練習）は必須である。学生は自らがその役割を認識し、自主的に個人練習を行っていた。さらに、各パート（5名～10名程度の小グループ）で毎週定期的に自主的な練習も行っていた。前期は基本的に基礎練習、課題曲を中心に、後期は、前述の楽友会コンサートで演奏する楽曲、および小編成アンサンブルの練習を中心に行った。

自主的な練習ではあるが、より効果的なものとするため、授業内で課題を与え、特に初心者に対するきめ細かな指導法を伝授した。適切な教則本、練習曲などは随時提示し、適宜質問を受け付け授業担当者と参加学生のコミュニケーションを密に行い、授業外活動における円滑な運営を行わせることができた。

特に参加学生に目的を持って練習させることに主眼を置き、細かな練習内容の指示は学生授業代表者、各パートリーダーを通じ頻繁に行った。

その結果、学生の自主的な練習活動に加え、効果的な指導が行われ、初心者学生を多く含むにもかかわらず、非常にレベルの高い演奏を行うことができ、経験者学生にとっては授業内、授業外学習（練習）において「指導する」ということを体験することができた。

### 4. 授業アンケート

ほとんどの学生が「合奏、アンサンブルする喜び」を感じ、また短い時間、少ない練習回数（1週1回1時間30分）にもかかわらず質の高い演奏活動ができたことを感じていた。通常、吹奏楽練習は中等高等学校では部活動として毎日行われており、これらを経験した学生にとっては練習回数の点で物足りないと感じた者もいた。今回は本格的なクラシック曲、たとえば前期のピアノ協奏曲、ジョージ・ガーシュイン作曲の「ラプソディ・イン・ブルー」を演奏したが、この曲に関しては満足度も高かった。また、この楽曲は前期の最後に行った授業アンケートで学生からの演奏希望

が高かった楽曲であり、学生が独奏を担当したことも高評価を得た。授業のアンケートではないが、上記楽友会コンサートにおける観客アンケートでも非常に高い評価を得ることができ、これは学生への自信につながり、かつまた学生たち自身のアンケートによる高い満足度につながったと思われる。

### 5. 今後の課題

各学期で1時間30分の授業が15回、うち初回をガイダンスに、最終授業を授業内発表に充てると実質的には13回の練習回数となるが、これは授業アンケートからも読み取れるように少ないと思われる。授業回数が決まっている以上、この中でより効果的な練習活動を行う必要があるが、このためには授業時間外活動が非常に重要となる。

各パートの練習は学生の自主活動により比較的毎週行われているが、そのための個人的な練習は必ずしもすべての学生に定着しているわけではない。基本的な演奏法、各楽曲の個人的な問題の克服は授業時間外に行うことが重要である。楽器の演奏はとにかく毎日行うことが上達への早道で、様々な事柄に忙殺される学生に毎日少しでもいいから楽器にさわって練習する、という「癖」をつけさせることが肝要かと思われる。

また、特に教員を志す学生にとってこの器楽アンサンブル（吹奏楽）の授業は、たとえば部活動の指導において直接的に役立つ科目と言える。教育学部で音楽を専門とする学生ができるだけ多くこの授業を選択させることができる魅力ある授業、あるいは即戦力として役立つ授業を行い、さらに「音楽の専門家」としての心構えを身につけさせることが今後の課題である。